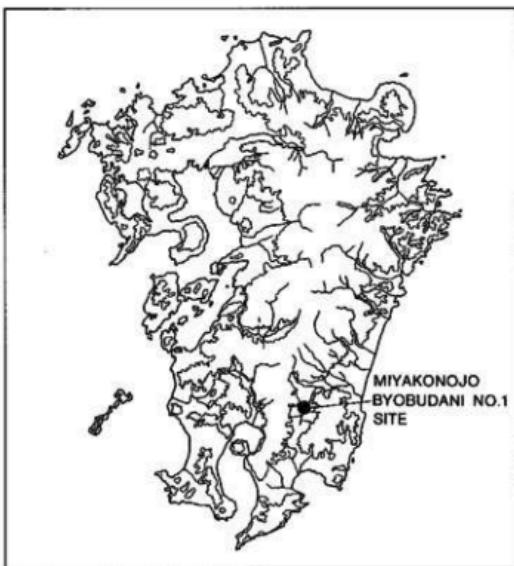


BYOBUDANI DAIICHI - SITE
屏風谷 第1遺跡

1992年3月

宮崎県都城市教育委員会

BYOBUDANI DAIICHI - SITE
屏風谷 第1遺跡



1992年3月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は、都城地区製材業協同組合の移転工事に先だって、記録保存のために行った屏風谷第1遺跡の発掘調査成果を報告するものです。

埋蔵文化財をはじめ文化財は、歴史や文化を知るための貴重な資料であります。私たちには、これらの財産を正しく把握し、子々孫々に伝えていく義務があります。

今回の調査では、厚く降り積もった火山灰の下から、今まで都城地方で発見例の少なかった縄文時代の古い段階（約7～8千年前）の道具や生活跡が発見されました。

これらの資料が生きた歴史教材として活用されるとともに、今後の学術研究に少しでも寄与できることを願っております。

発刊にあたり、厳寒の中、発掘調査を直接担当していただいた宮崎県文化課の先生方をはじめ、調査に全面的に協力していただいた都城地区製材業協同組合や調査関係者に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

都城市教育委員会

教育長 隈 元 幸 美

例　　言

1. 本書は国産林産地体制整備事業に基づく国の助成を受けた都城地区製材業協同組合の移転工事に伴い、都城市教育委員会が受託事業として平成2年度に実施した屏風谷第1遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、宮崎県文化課主事飯田博之、同主事東憲章氏、同嘱託吉永真也氏（現都農町教育委員会）が調査を担当した。なお、発掘調査の経費は、原因者である都城地区製材業協同組合が負担した。
3. 発掘調査地は都城市上水流町4201番地外であり、発掘調査の期間は、平成3年1月24日から3月13日までである。なお、調査面積は約600m²である。
4. 出土遺物の整理作業（水洗・復元・注記）については都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室にて行った。
5. 本書掲載の遺構等の実測図の作成と写真撮影は調査担当者があたり、遺物等の実測・トレースは都城市文化課で行った。なお、遺跡の空中写真は、株式会社スカイサーベイに委託した。
6. 本書に使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔高である。
7. 本書の執筆は、第3章1-(1)を吉永真也氏が行い、他は都城市文化課主事森畠光博が担当した。なお、編集は森畠があつた。
8. 出土石器の石材鑑定については、鹿児島県立玉童高校教諭成尾英仁氏に依頼した。
また、出土遺物等に関して次の方々から貴重な助言・教示を得た。

河口貞徳（鹿児島県考古学会会長）

新東晃一・宮田栄二・長野真一・弥栄久志・井ノ上秀文・前迫亮一

（以上鹿児島県文化課埋蔵文化財担当職員）

本田道輝（鹿児島大学助手）、雨宮瑞生（筑波大学大学院生）

8. 発掘調査における全ての記録と出土遺物は都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室で保管している。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
(1)当初の開発計画と第1次試掘調査	1
(2)新たな開発計画と第2次試掘調査	1
(3)埋蔵文化財の取扱いに関する協議	2
2. 発掘調査の組織	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 周辺の遺跡	3
第3章 発掘調査の記録	6
1. 調査の方法と概要	6
(1)A区の概要	6
(2)B区の概要	6
(3)C区の概要	6
2. 遺跡の地図	11
3. 遺構	12
(1)縄文時代の遺構	12
ア. 集石遺構	12
イ. 土坑	12
(2)その他の遺構	15
4. 遺物	15
(1)縄文時代の土器	15
ア. 縄文時代早期の土器	15
イ. 縄文時代晚期の土器	20
(2)縄文時代の石器	20
(3)弥生時代の遺物	24
第4章 まとめ	25
1. 縄文時代早期の遺物について	25
2. 総括	27

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡周辺地形図	4
第3図 下藪遺跡採集土器	5
第4図 調査区域図	7~8
第5図 A区遺構配置図および遺物分布図	9~10
第6図 基本階序（試掘13トレンチ東壁土層断面図）	11
第7図 A区土坑実測図	12
第8図 C区遺構実測図	12
第9図 土層断面図	13~14
第10図 遺物実測図(1)	16
第11図 遺物実測図(2)	17
第12図 遺物実測図(3)	21
第13図 遺物実測図(4)	22
第14図 遺物実測図(5)	23
第15図 遺物実測図(6)	24
第16図 芳ヶ迫第3遺跡・打馬平原遺跡出土土器	25
第17図 押型文の施された円筒形土器	26

表目次

第1表 土器観察表(1)・(2)	18~19
第2表 石器計測表	20

図版目次

図版 1	(1)遺跡遠景（西から）	29
	(2)遺跡空中写真（東側上空から）	29
図版 2	(1)A区X層遺物出土状況（南から）	30
	(2)A区X層遺物出土状況（北から）	30
図版 3	(1)A区XI層上面（北から）	31
	(2)A区土層断面（東壁）	31
図版 4	(1)A区土坑確認状況（東から）	32
	(2)A区土坑完掘状況（南から）	32
	(3)A区押型文土器出土状況	32
	(4)A区X層調査風景（南から）	32
	(5)A区XI層調査風景（南から）	32
図版 5	(1)B区完掘状況（南から）	33
	(2)B区土層断面（北壁）	33
図版 6	(1)C区空中写真（北側上空から）	34
	(2)C-1区1号溝完掘状況（西から）	34
	(3)C-1区1号溝断面	34
図版 7	(1)第1類土器（条線文土器）	35
	(2)第1類土器（条線文土器）	35
	(3)第4類土器（押型文土器）	35
図版 8	(1)第2・3・5類土器	36
	(2)第1・4類土器底部	36
図版 9	(1)第1類土器文様拡大	37
	(2)第2類土器文様拡大	37
	(3)押型文土器口縁部内面文様拡大	37
図版10	(1)剥片石器	38
	(2)砾石器	38
図版11	(1)剥片	39
	(2)縄文時代晚期土器および弥生土器	39

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

(1)当初の開発計画と第1次試掘調査

平成2年1月初旬、都北町から上水流町の都城地区生コンクリート協同組合跡地への移転を計画していた都城地区製材業協同組合から、都城市教育委員会に、上水流町2877番地外の埋蔵文化財の有無の照会がなされた。市教育委員会では、当該地区が、昭和63年の都城市遺跡詳細分布調査によって確認されていた屏風谷第1遺跡（市内遺跡番号10040）に含まれ、周辺に宮崎県指定文化財志和池村古墳第9号～第12号も存在することから、一帯の遺跡の可能性が高いと判断したため、平成2年3月22日から24日にかけて試掘調査を実施した。試掘調査の結果、同組合の事務所建設予定地は地表下約1.5mにわたって、それ以前の都城地区生コンクリート協同組合建設の際の搅乱と盛土が確認され、遺物包含層の残存は認められなかった。

(2)新たな開発計画と第2次試掘調査

平成2年の6月になって、同組合から先に照会のあった地点の南側約4ヘクタールに新たに木材置場の造成の計画が示され、8月13日にその説明会が開かれた。市教育委員会は、対象地の埋蔵文化財を把握するために、8月20日から31日まで第2次の試掘調査を行った（第4図）。試掘に際しては、重機で厚い火山灰層を剥ぎ、なるべく下層の遺物包含層を確認することに努めた。その結果、御池軽石層の上から、縄文時代晩期と弥生時代の文化層が発見され、さらにその下のアカホヤ火山灰層の下に縄文時代早期の遺物包含層が認められた。



▲第1次試掘調査状況



▲第2次試掘調査状況（第14トレンチ）

(3)埋蔵文化財の取扱いに関する協議

試掘調査の結果を受け、組合と市教育委員会とで平成2年10月1日に埋蔵文化財の取扱いに関する協議を行った。そこで、木材置場については、簡易アスファルト舗装になるため、削平予定範囲の大部分を盛土に変更してもらうこととし、6mの道路敷設予定地については、道路の床掘りによって影響のある部分の記録保存を行うという取り決めを行い、組合が発掘調査費用を負担し、受託事業として市教育委員会が発掘調査することが決まった。さらに、発掘調査の費用を教育委員会が見積り、12月の補正予算に計上した。なお、11月27日に事業受託の契約を締結した。現場における発掘調査については、この時期に市教育委員会は、2か所の大規模発掘事業を抱えており、調査員の余裕がなかったため、宮崎県教育委員会に発掘調査員の派遣依頼を申請した。発掘調査は平成3年1月24日から3月13日まで行った。なお、出土品の整理作業は、平成3年度に都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室において行った。

2. 調査の組織

調査主体	都城市教育委員会	教育長	久味木福市	(平成2年度)
	都城市教育委員会	教育長	黒元 幸美	(平成3年度)
調査責任者	都城市教育委員会文化課文化課長		成竹 清光	(平成2・3年度)
	都城市教育委員会文化課文化課長補佐兼係長		遠矢 昭夫	(平成2・3年度)
	都城市教育委員会文化課文化財係長		海田 茂	(平成3年度)
事務担当者	都城市教育委員会文化課主事補		田部井寿代	(平成2・3年度)
調査担当者	宮崎県教育委員会文化課主事		飯田 博之	(平成2年度)
	宮崎県教育委員会文化課主事		東 憲章	(平成2年度)
	宮崎県教育委員会文化課嘱託		吉永 真也	(平成2年度)
	都城市教育委員会文化課主事		栗畑 光博	(平成3年度)
特別調査員	(出土遺物指導) 鹿児島考古学会会長		河口 貞徳	(平成2年度)
発掘作業員	花堂武義, 花堂ノブ, 裝輪綾子, 柿木スミ子, 堀之内ミツ子, 柿木チエ子, 柿木キクエ, 内村クニ, 中村ハツノ, 中村カズエ, 森山アキ, 倉盛サチ子, 松木ミチ, 榎木ハナ, 福盛ノブ子, 丸日ミチエ, 宮丸祐子, 中原武夫, 中原貢良, 和田利雄, 藤田フジ子, 立山君子, 宮元孝子, 来住キヨコ, 南スミ子, 桑畠ミキ, 福盛ヤエ子, 河内山徳子, 柿木巖			
整理作業員	前幸男(鹿児島大学学生), 横井正人(鹿児島大学研究生), 猪股幸千代, 池谷香代子, 水上和子			

註

註1. 栗畑光博編 1989 「都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内北東部)」都城市文化財調査報告書第8集
都城市教育委員会

第2章 遺跡の位置と環境

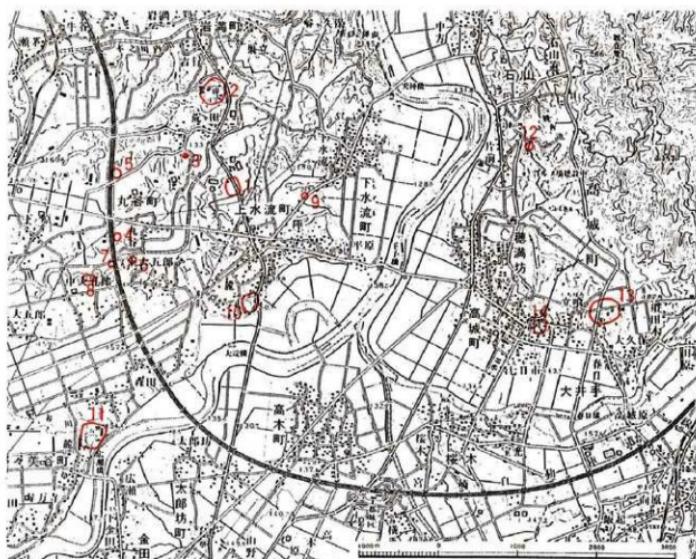
1. 遺跡の位置

宮崎県都城市は、九州島の東南部に位置する。市域は東を鰐塚山地、西を霧島山地に囲まれた南北に長い都城盆地のほぼ中央を占める。

屏風谷第1遺跡は都城市の北東部の上水流町に所在する。遺跡は、北流する大淀川の本流とその支流である丸谷川に挟まれた標高約150mの台地の西端に立地する。一帯は、いくつもの細く小さい谷が台地の内側へ入り込み、おおむねそれらの谷頭には、湧水点が見られる。

2. 周辺の遺跡

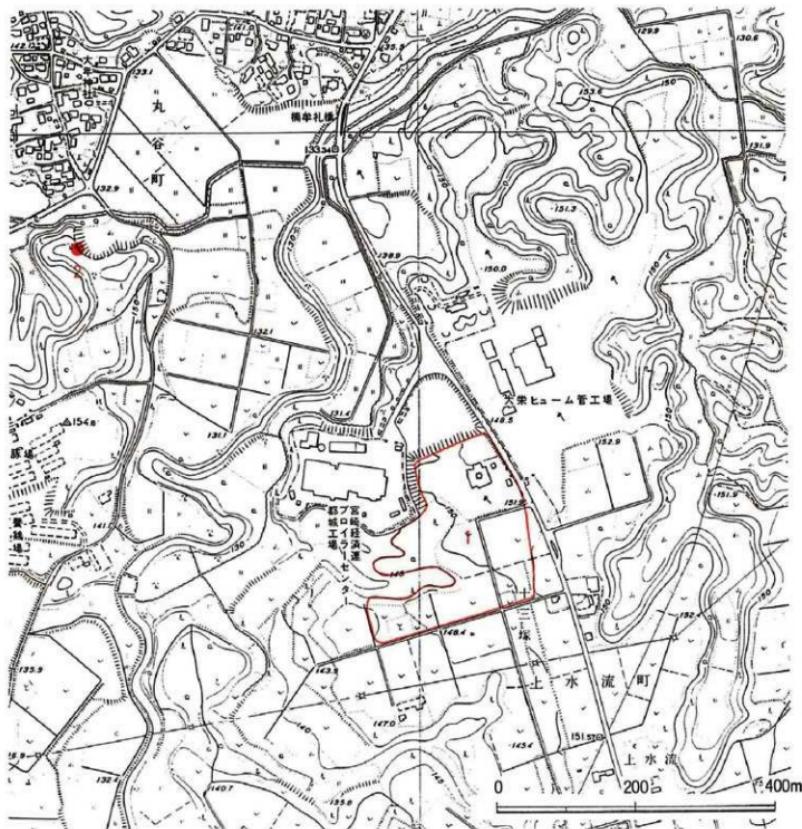
遺跡の周囲を眺めると、同じ台地上には、県指定の志和池村古墳群が営まれており、台地の南端部には志和池城や野々美谷城などのシラス台地を利用した「南九州型」の中世城郭が築かれている。西側を流れる丸谷川流域の河岸段丘上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が集中して見つかっており、当該期の集落の動態を把握することのできる注目すべき遺跡群である。本遺跡の東側を流れる大淀川の対岸に目を転じると、台地上に縄文時代、弥生時代、平安時代の遺構・遺物の発掘された城ヶ尾遺跡があり、都城盆地内で最大規模の前方後円墳をもつ牧の原古墳群が存在する。縄文時代早



- | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 屏風谷第1遺跡 | 2. 堂山遺跡 | 3. 下薙遺跡 | 4. 丸谷第1遺跡 |
| 5. 丸谷第2遺跡 | 6. 下大五郎遺跡 | 7. 下川原遺跡 | 8. 中大五郎遺跡 |
| 9. 志和池1号墳 | 10. 志和池城跡 | 11. 野々美谷城跡 | 12. 城ヶ尾遺跡 |
| 13. 牧の原古墳群 | 14. 日和城跡 | | |

第1図 遺跡位置図

期の資料に限って見てみると、丸谷川西岸の丘陵上にある堂山遺跡（南地区）では、厚く降り積もった火山灰層の下から、円筒形土器、押型文土器、平柄式土器、塞ノ神式土器や多数の石器の他、集石遺構などが見つかっている。^{註4} 堂山遺跡の南方約1kmの下藪遺跡では、シラス採りのために削られた崖面から、押型文の施された壺形土器が採集されている（第3図）。さて、縄文時代早期に属する壺形土器の発見例は、最近、宮崎県をはじめ鹿児島県や熊本県などで増えつつあり、その系譜や機能について、論じられている。なお、都城市内では、下藪遺跡の他に関之尾町の丸山第2遺跡で、撲糸文の施された壺形土器が採集されている。

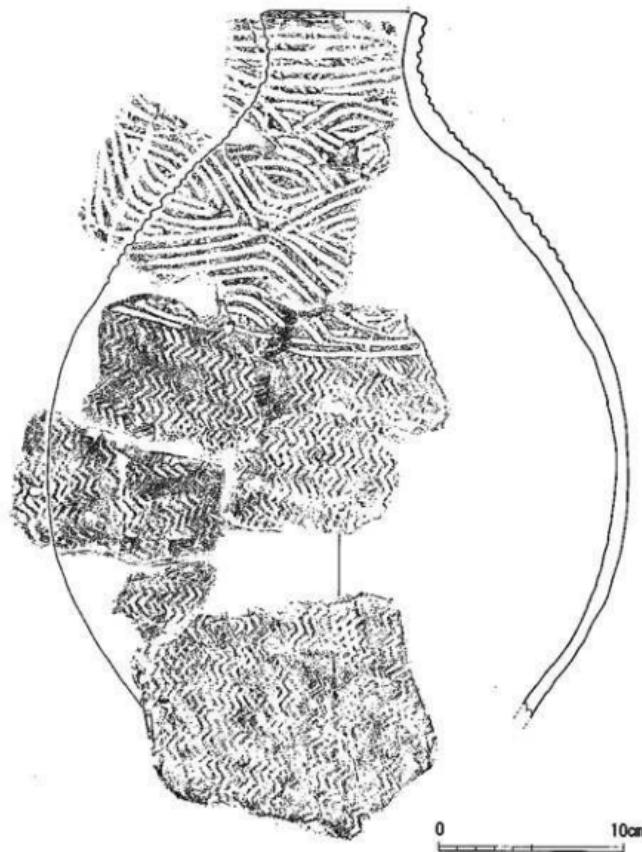


第2図 遺跡周辺地形図

1：屏風谷第1遺跡 2：下藪遺跡

註

- 註1 村田修三 1987「城の分布」「図説中世城郭事典」第3巻 新人物往来社
- 註2 平成2・3年度に調査された下大五郎遺跡や中大五郎遺跡などがある。(いずれも報告書は未刊行)
- 註3 長津宗重編 1989「城ヶ尾遺跡」高城町文化財調査報告書第1集 高城町教育委員会
- 註4 矢部喜多夫 1991「堂山(南地区)遺跡」『平成2年度遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第13集 都城市教育委員会
- 註5 西日本新聞 1989年2月3日朝刊掲載記事
- 註6 松舟博綱 1990「手向山式土器の壺について」『肥後考古』第7号 肥後考古学会
新東晃一 1991「縄文早期の壺形土器」『南九州縄文通信』No.4 南九州縄文研究会



第3図 下藪遺跡探集土器実測図(矢部喜多夫作成)

第3章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と概要

(1) A区の概要

A区の調査は、まず重機を使用し、I層（表土）からIII層（御池降下軽石）を取り除く作業から入った。調査地は以前の整地工事により、かなり削平されていて、II層は、わずか1~1.5mほどしか残存していないかった。そのためIV層上面までは重機による取り除き作業を容易に行うことができた。さらに、試掘調査で遺物の認められなかったIV層（黒色土）～VI層（アカホヤ火山灰層）も重機により取り除いた。この時点で、調査区の深さは2mを超えていた。V層上面を出した段階で、調査区の北側はほぼ平坦面で、丘陵の頂上部と思われるが、南側は南東方向に向かってかなり急な傾斜になっており、深さは最深部で4mであった。VI層以下は作業員の手掘りによる調査であったが、最も浅いところでも、深さが2.5mを超えていたため、耕土の処理はベルトコンベアなどの機械を導入しての作業であった。この結果、V～IX層までの間では、遺構・遺物の出土は認められなかった。しかし、X層の中位から焼石などの礫が調査区のほぼ全域から出土はじめ、X層の下部を中心に押型文土器や円筒形土器、石鎌、スクレイバーなどの石器が出土した。また、極少量ではあるが、XI層上部からも、無文土器および石器が出土している。さらに、X層を掘りこんで、IX層を埋土とする土坑が1基発見されている。土器の出土状況に関する調査時の所見として、押型文土器は調査区の中央部と傾斜面に集中して出土したのに対し、円筒形土器は調査区の北部平坦面に集中して出土したことがあげられる（第5図）。

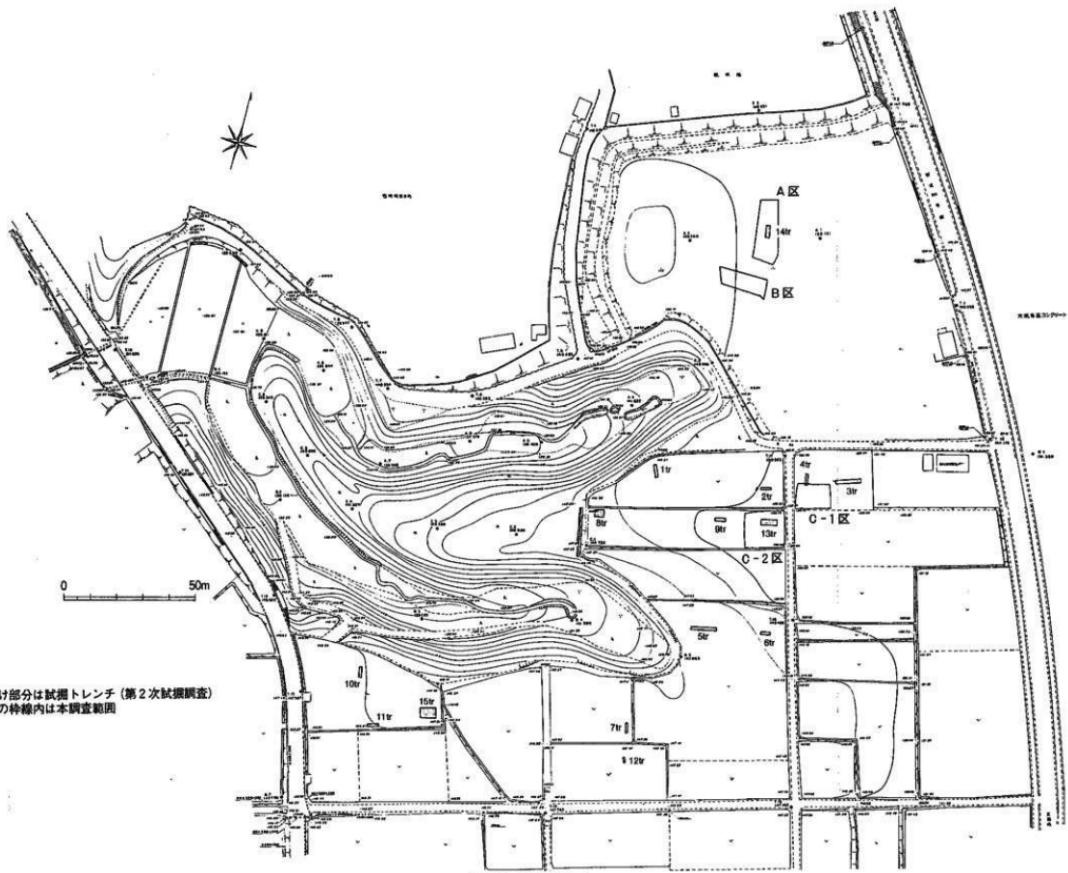
この調査区の遺物包含層は、XI層上部までであり、これより下位については、トレンチを設定し、確認を行った結果、遺物の出土は認められなかった。

(2) B区の概要

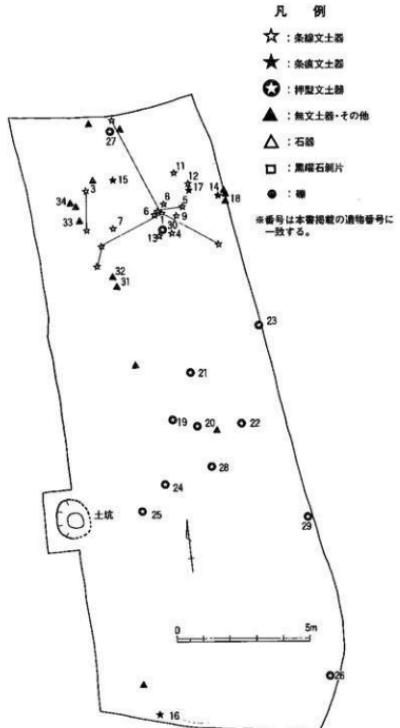
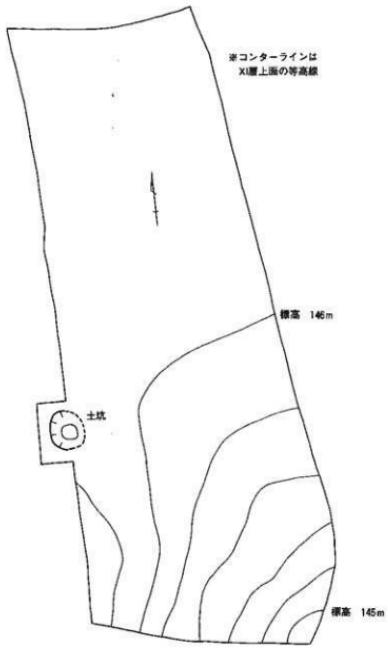
上記の遺物包含層のつながりを確認するために、A区の南側6mの地点に東西方向のトレンチを設け、B区とした。ここでも、VI層（アカホヤ火山灰層）までは重機で掘り下げ、それ以下の層を調査した。その結果、南西側へ地層の急激な傾斜が認められ、X・XI層からは遺物の出土がみられなかつた。これにより、御池降下軽石層が堆積する以前は、現在の谷が、さらに東へ入り込んでいたものと推定された。

(3) C区の概要

この地点の工事は、50cm程度の削平が予定されており、地表下約5mの縄文時代早期の遺物包含層には影響が及ばないと判断されたので、御池降下軽石層の上に堆積する黒色土層（II層）のみの調査を行うことにした。ごぼうの植え付けによる擾乱が著しく（第9図）、包含層中の遺物の検出は困難を極めたが、C-2区からは弥生時代の土器が見つかっている。遺構は、東側のC-1区と西側のC-2区で、ほぼ同時期のものと思われる溝状遺構がそれぞれ1本ずつ確認されている。



第4図 調査区域図



2. 遺跡の地層 (第6・9図)

第6図に、本遺跡の基本土層として、第2次試掘調査の第13トレンチの土層断面図を掲げた。なお、各調査区ごとの土層は第9図に示した。

このトレンチでは地表下約6mまで、12枚の層が確認されている。

I層は層厚約25cmの暗オリーブ色砂質土層で、現在

の耕作土層である。

II層は層厚約50cmの黒色を基調とした腐植土層で、

上下2枚に分かれる。IIa層は軟質のシルト

層で、IIb層はやや硬く、黄白色の軽石粒を

含んでいる。

III層は層厚約2.5mの黄白色の軽石層である。霧島火

山御池火口から噴出した御池降下軽石層にあ

る。年代は縄文時代後期頃と推定されてい

る。

IV層は層厚約25cmの黒色粘質シルトの腐植土層であ

る。

V層は層厚約20cmの暗灰色の粘質層で、黄褐色粒子

を含む。

VI層は層厚約50cm、黄色軽石と褐色火山豆石からな

る下部とガラスに富む黄色細粒火山灰からな

る上部に区分できる。約6300年前に鬼界カル

デラから噴出したアカホヤ火山灰層にあたる。

VII層は層厚約24cmの黒色砂質シルトの腐植土層であ

る。

VIII層は層厚約15cmの黒褐色シルト層を基本とし、黄

白色軽石および赤褐色のスコリアを多量に含

んでいる。全体的にザラザラした感触を受け

る。このスコリアは古高千穂火山起源の霧島

一浦牟田スコリアにあたる。

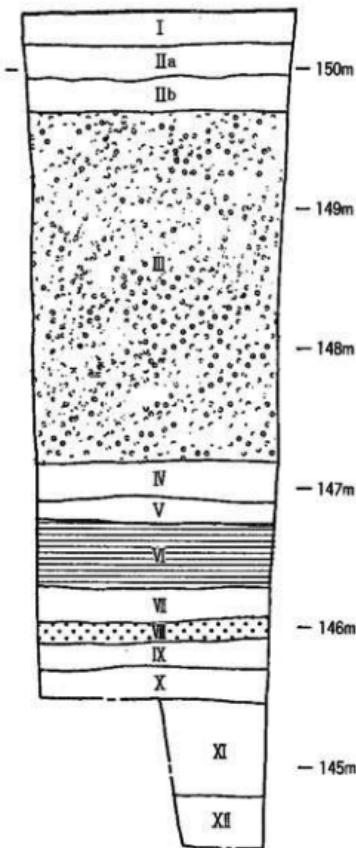
IX層は層厚15cmから20cm、暗褐色粘質土層である。

X層は層厚約20cmの褐色粘質土層である。

XI層は層厚約65cmの明褐色粘質土層である。

XII層は灰オリーブ色の砂質層である。河川堆積物な

いし火山灰層の2次堆積層と思われる。



第6図 基本層序
(試掘13トレンチ東壁土層断面図)

3. 造構

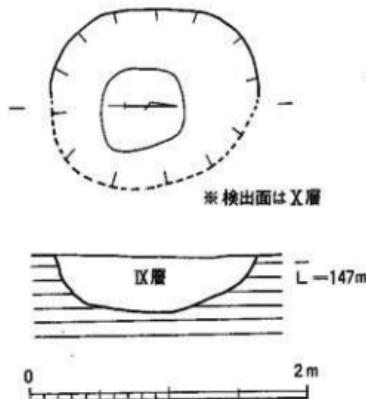
(1) 縄文時代の造構

ア. 集石造構 (第5図)

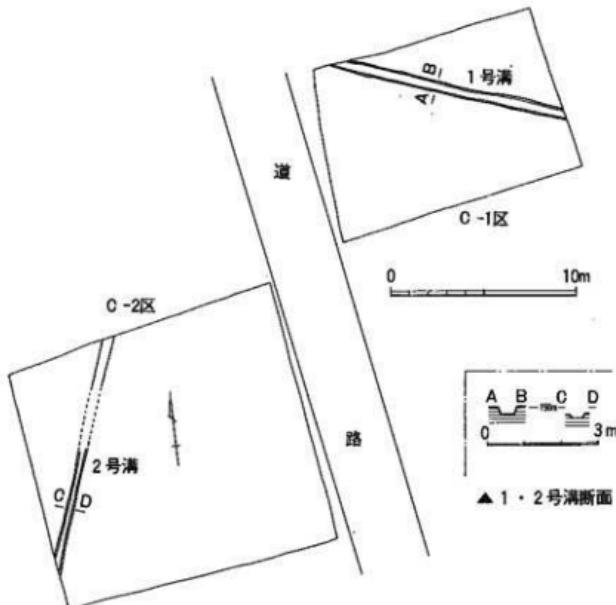
A区の北東壁付近のX層面において約1mの範囲に、碎けた転疊が集中しており、検出面下、約50cmまでその分布がみられた。疊の大きさは10cm程度の大きさで、26個を数える。中には赤色化したものも見られる。わりと粗な集石造構と推定される。

イ. 土坑 (第7図)

A区のX層を掘り下げた段階で、西南壁際に上層からの落ち込みが観察された。そこで、調査範囲をさらに西側に拡張した結果、南北1.5m、東西1.8mの橢円形の土坑が確認された。検出面(X層中位)からの深さは40cmであり、造構内にはIX層が堆積している。土坑上面に2個の疊と、造構内の床面付近に数個の炭化粒が見つかっている。

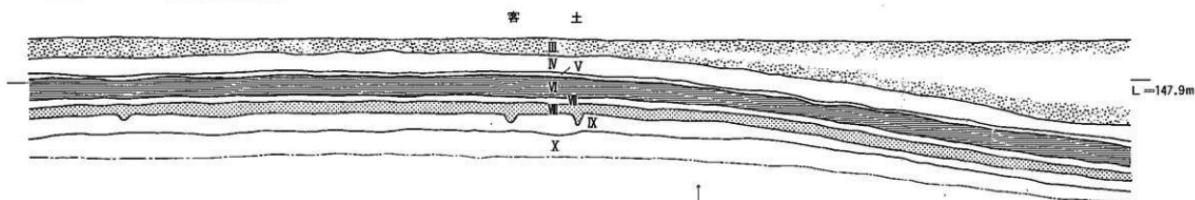


第7図 A区土坑実測図

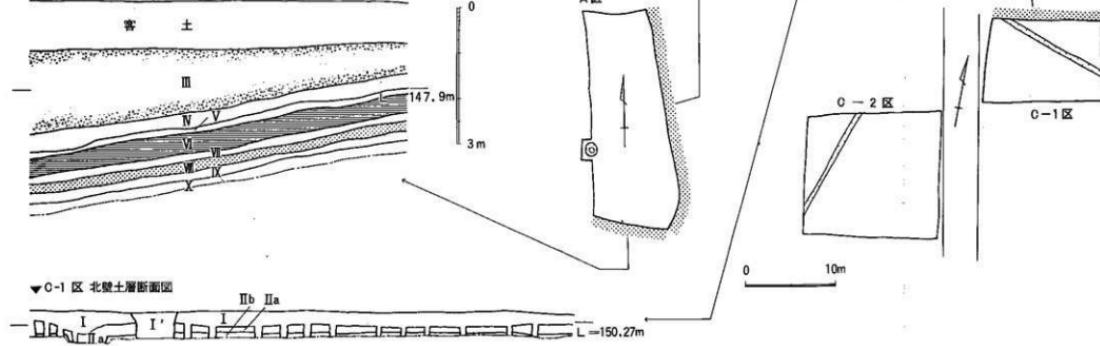


第8図 C区 造構実測図

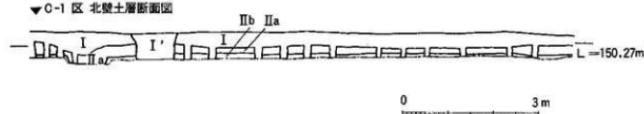
▼ A区 東壁土層断面図



▼ A区 南壁土層断面図



▼ O-1区 北壁土層断面図



第9図 土層断面図

(2)その他の遺構（第8図）

C-1区では東西方向に、C-2区では南北方向に走行する溝状遺構が合わせて2条見つかっている（1・2号溝）。1号溝は幅60cmで、検出面からの深さ20cmである。2号溝は幅50cmで、検出面からの深さ10cmである。両者ともに溝内堆積土は、IIa層である。遺構内において遺物の出土は見られず、時期の特定が困難である。さて、都城盆地においては、御池軽石層の上に堆積する文化層には、おおむね次のような序列がみられる。御池軽石層直上の軽石粒を比較的多く含む黒色土に縄文時代後期から弥生時代の遺物が出土し、その上に堆積する軽石粒を含まない黒色土に奈良時代から室町時代の遺物が含まれる傾向が看取されるのである。したがって、後者の埋土をもつC区の溝状遺構は歴史時代（古代～中世）のものと考えたほうが妥当であろう。

4. 遺物

遺物については本調査の出土資料の他に、第2次試掘調査の出土資料にも触れることにする。

(1)縄文時代の土器

ア. 縄文時代早期の土器（第10-11図）

A区のX層からXI層にかけて縄文時代早期の土器が出土している。それらの土器を文様等から、次の5類に分類した。

第1類土器（条線文土器 1～13）

1～13は外面に縱位と横位に平行する沈線文が描かれる円筒形深鉢形のグループである。胴部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がり、口縁端部がふくらむという特徴的な形態を呈している。また口唇部内面は工具によるミガキ状の調整が施され、2を見るかぎり、凸面状を呈する底部の底面にも同じような調整が観察できる。文様施文は、2本単位のクシ状の工具によって、縱方向に密に条線を引いた後、間隔を開けながら横方向に、2～3条の条線を引いている。条線の中には施文具の粗い繊維による擦過痕が見られる。1～12はすべてX層から出土しており、いずれも胎土にセキエイや粗い砂粒を含んでいるという点から、同一個体の可能性がある。ただし1の復元径（口径・胴部最大径）と2の底部径とはあまりにも大きさが違い過ぎるので別個体かもしれない。

第2類土器（条痕文土器 14～17）

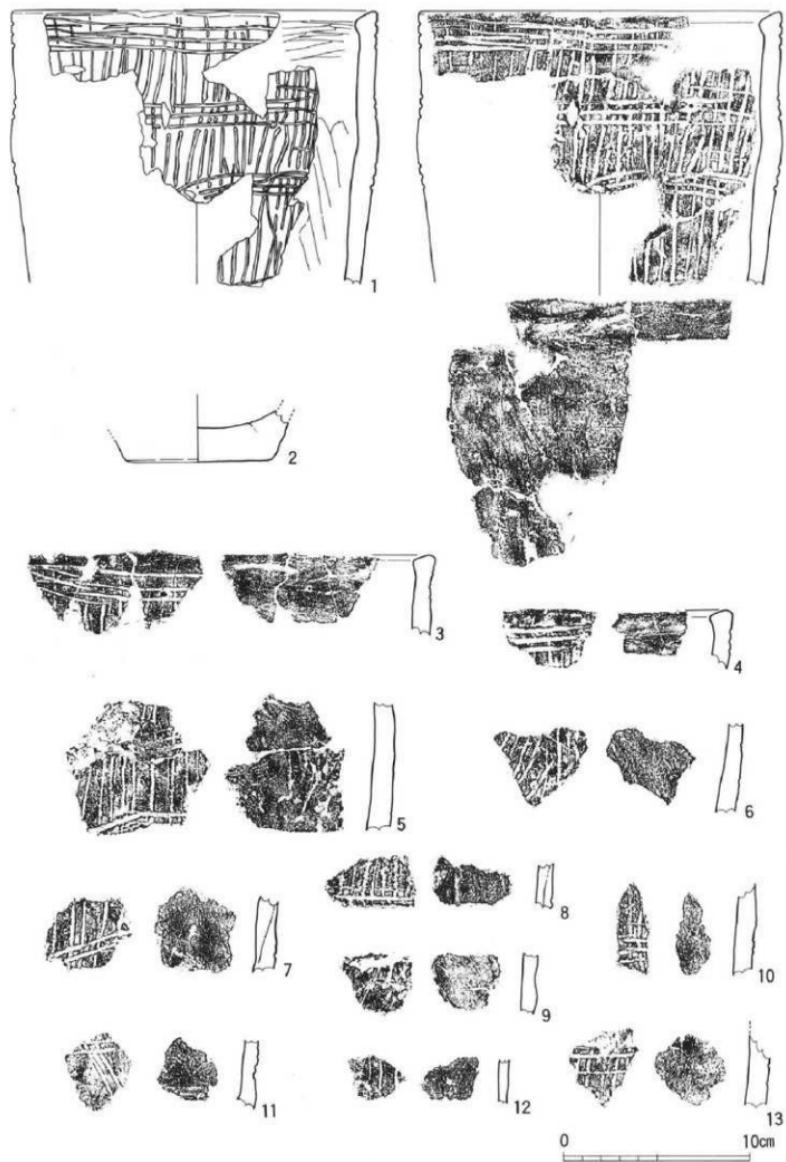
14と15は胎土・色調が類似している。両者ともに外面に斜行する浅い条痕がみられ、内面は丁寧にナデされている。16と17はXI層からの出土であるが、両者ともに外面の剥落が著しく、もろい。赤色化していることから、2次加熱を受けている可能性がある。

第3類土器（突帯文土器 18）

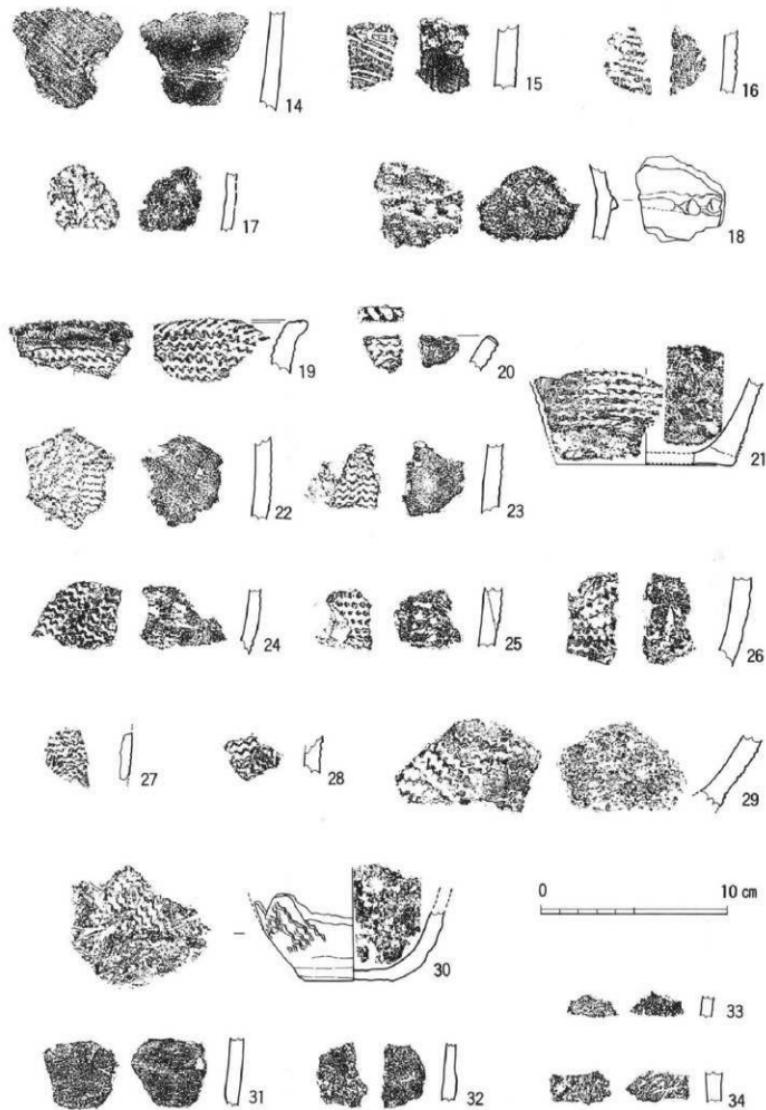
18は他の土器に比べて著しく風化が進んでおり、外面に貼りつけられた突帯も一部剥落している。突帯には指先の押圧による刻みが施されている。

第4類土器（押型文土器 19～30）

胎土にウンモを含まない19～23と含んでいる24～30とに分けられる。後者は概してろく、水洗いの際にくずれやすかった。25のみが楕円押型文であり、他はすべて山形押型文である。19は、口縁部内面に横方向に押型文を施し、口唇部には器の外から内側へ向かって先端の鋭い工具により連續刺



第10図 遺物実測図(1)



第11図 遺物実測図(2)

第1表 土器観察表(1)

番号	出土地点	層	器種	色調	胎土	調整	備考
1	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい黒・明褐色 内=暗褐色	チョウ石 セキエイ	外=ナダ 内=上半はヨコ方向のミガキ 下半はタテ方向の工具ナダ	1~11は同一個体? 外面部にスス付有 No131, 132, 143, 161, 197
2	14トレンチ	X層	深鉢形	外=にぶい褐色 内=褐色	セキエイ	外=ナダ 底面=ミガキ 内=ナダ	
3	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=褐色	セキエイ	外=ナダ 内=ヨコ方向のミガキ・ナダ	No226, 230
4	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい褐色 内=にぶい褐色	セキエイ	外=ナダ 内=ヨコ方向のミガキ	No142
5	A 区	X層	深鉢形	外=淡褐色 内=灰黒色	セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	No159, 165
6	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい橙 内=灰黒色	セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	No166
7	A 区	X層	深鉢形	外=橙色 内=にぶい橙色	セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	No137
8	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい橙色 内=灰黒色	セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	No162
9	A 区	X層	深鉢形	外=淡褐色 内=灰黒色	セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	No160
10	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい褐色 内=灰黒色	セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	No132
11	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい橙色 内=灰黒色	セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	No177
12	A 区	X層	深鉢形	外=橙色 内=灰黒色		外=ナダ 内=ナダ	No176
13	A 区	X層上	深鉢形	外=暗褐色 内=褐色		外=ナダ 内=ナダ	No289
14	A 区	X層	深鉢形	外=浅黄色 内=灰褐色	チョウ石 セキエイ	外=ナナメ方向の柔軟 内=ていねいなナダ	No154
15	A 区	X層	深鉢形	外=浅黄色 内=灰褐色	チョウ石 セキエイ	外=ヨコ方向の柔軟 内=ていねいなナダ	No225
16	A 区	X層上	深鉢形	外=赤褐色 内=暗褐色	チョウ石	外=ナナメ方向の柔軟 内=ナダ	No279
17	A 区	X層上	深鉢形	外=橙色 内=暗褐色	チョウ石	外=剥落している 内=ナダ	No295
18	A 区	X層	深鉢形?	外=浅黄色 内=浅黄色	セキエイ	内外とともに風化が著しい	No153
19	A 区	X層	深鉢形	外=暗褐色 内=褐色	チョウ石 カクセン石	外=ナダ 内=ナダ	山形押型文 No71
20	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=褐色	チョウ石 ?	外=ナダ 内=ヨコナダ	山形押型文 No69
21	A 区	X層	深鉢形	外=橙色 内=灰黒色	チョウ石 カクセン石	外=ナダ 部分的に剥落 内=ナダ	山形押型文 No73
22	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい橙色 内=灰黒色	チョウ石 カクセン石	外=ナダ 部分的に剥落 内=ナダ	山形押型文 No66
23	A 区	X層	深鉢形	外=赤褐色 内=浅黄色	チョウ石 カクセン石	外=ナダ 底面=ナダ 内=ナダ	山形押型文 No81
24	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=褐色	クロウンモ セキエイ	外=ナダ 内=ナダ	山形押型文 No54

土器観察表(2)

番号	出土地点	層	器種	色調	胎土	測定	備考
25	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=黑色	クロウンモ セキエイ	外=ナデ 内=ナデ 部分的に剥落	山形押型文 No53
26	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=ナデ	クロウンモ セキエイ	外=ナデ 内=ナデ	山形押型文 No12
27	A 区	X層	深鉢形	外=にぶい褐色 内=?	クロウンモ	外=ナデ 内=剥落している	山形押型文 No199
28	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=褐色	クロウンモ セキエイ	外=ナデ 内=ナデ 部分的に剥落	山形押型文 No59
29	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=褐色	クロウンモ セキエイ	外=ナデ 内=ナデ 部分的に剥落	山形押型文 No36
30	A 区	X層	深鉢形	外=褐色 内=暗褐色	クロウンモ	外=あらいナデ 内=ナデ 部分的に剥落	山形押型文 No141
31	A 区	XI層上	深鉢形	外=淡黄色 内=黒褐色	チョウ石	外=ナデ 内=ヨコ方向のナデ	No287
32	A 区	XI層上	深鉢形	外=淡褐色 内=黒褐色	チョウ石	外=ナデ 内=ナデ	No288
33	A 区	XI層上	深鉢形	外=淡褐色 内=浅黄色	チョウ石	外=ナデ 内=ナデ	No291
34	A 区	XI層上	深鉢形	外=淡褐色 内=浅黄色	チョウ石	外=ナデ 内=ナデ	No293
46	3トレンチ	II b層	深鉢形?	外=褐色 内=浅黄色	チョウ石	外=ヨコ方向ナデ 内=ヨコナデ	外面にスス付着
47	3トレンチ	II b層	深鉢形?	外=にぶい褐色 内=灰色	チョウ石	外=タテ方向ミガキ 内=タテ方向ミガキ	
48	3トレンチ	II b層	深鉢形?	外=褐色 内=黑色	セキエイ チョウ石	外=ていねいなナデ 内=ナデ	
49	C 区	II b層	壺 形	外=赤褐色 内=浅黄色	チョウ石	外=ていねいなナデ 内=ナデ	
50	C 区	II a層	壺 形	外=赤褐色 内=浅黄色	チョウ石	外=ていねいなナデ 内=ナデ	
51	7トレンチ	II b層	壺 形	外=浅黄色 内=浅黄色	カクセン石	外=ナデ 内=ヨコ方向のナデ 壺部に工具痕	

※出土地点のトレンチ番号は第2次試掘調査のもの。

胎土は肉眼で観察できた特徴的な鉱物を記載した。

備考欄の番号は、現場における遺物取り上げ番号。

突している。外面は約2cm程度の無文帯を残しその下に横方向に押型文を施している。20は口唇部に斜めの刻みを入れ、内面はヨコナデ、外面は横方向の押型文を施している。

26, 27, 28, 29, 30は外面に不定方向の山形押型文が施され、26, 29の押型文は他に比べ粗大な印象を受ける。23と30は底部である。23はすわりのよい平底で、胴部へと直線的に立ち上がっている。30は、丸底を押しつぶしたようなすわりの悪い平底で、小型の土器と推定される。内器面は剥落が見られ、底面に白色の物質が付着している。

第5類土器（無文土器 31~34）

31~34は文様のないものを一括した。すべてXI層からの出土である。32~34は色調等から同一個体と思われる。

イ. 縄文時代晩期の土器（第15図）

上記のA区出土土器以外に第2次試掘調査の第3トレンチにおいて、御池軽石層の上位に堆積するIIb層から46~48が出土している。46, 48は内外面ともに丁寧なナデが施され、47は内外面ともに研磨されている。46は外反する頸部から屈折して直線的に立ち上がる口縁部でその外面に一条の沈線が施される。48はあげ底状の底部である。これらの土器は、黒色磨研土器様式に属する縄文時代晩期初頭の土器と考えられる。

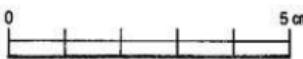
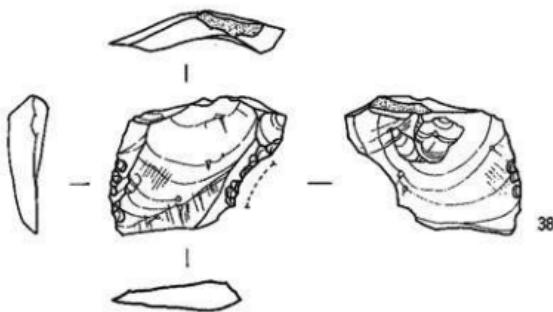
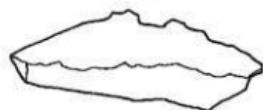
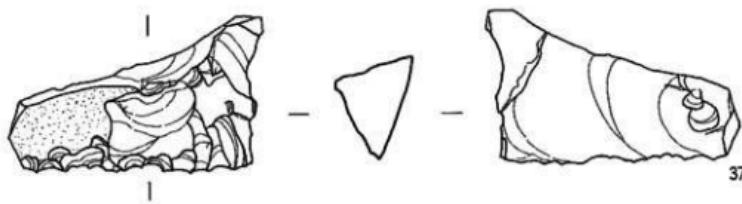
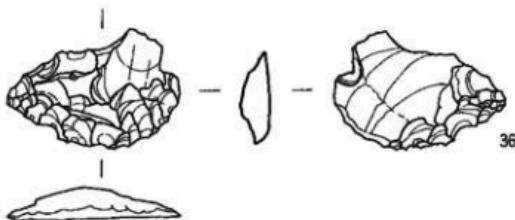
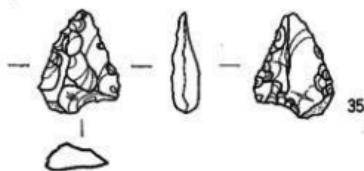
（2）縄文時代の石器（第12・13・14図）

35~40と42~45はA区のX・XI層から出土した石器である。同地点の同層からは他に黒曜石の剥片等が4点出土している（図版11(1)）。35は石鎌である。赤色を呈する粘板岩製で片面に主要剥離面を残し、側縁の調整は、あまり丁寧ではない。36と37はスクレイバーである。36は求心的な2次的剥離によって、外縁する刃縁がつくり出されている。一方、37の刃縁は直線的で、断面は三角形を呈する。38, 39, 40は使用痕と思われる微細な剥離のみられる剥片である。38は実測図の破線で示した部分

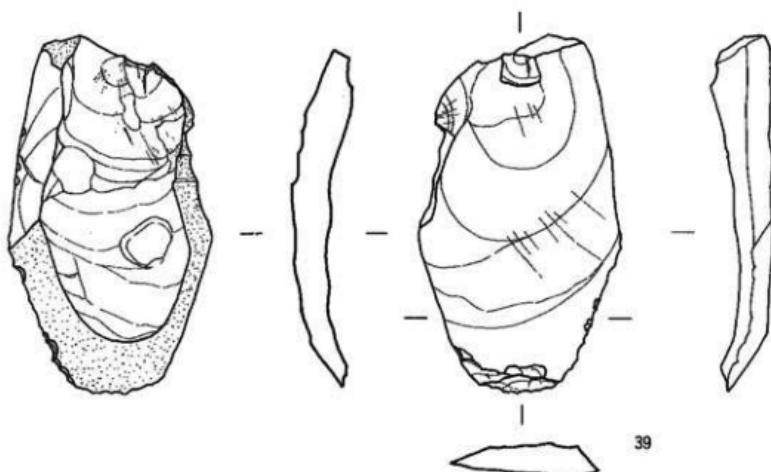
第2表 石器計測表

番号	出土地点	層	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
35	A区	X層	石鎌	粘板岩	1.9	1.4	0.5	1	No74
36	A区	X層	スクレイバー	メノウ	2.1	3.1	0.5	2.5	No134
37	A区	XI層上	スクレイバー	メノウ	2.7	4.5	1.2	11.8	No294
38	A区	X層	剥片石器	黒曜石	3.6	2.3	0.5	3.9	No6
39	A区	XI層上	剥片石器	頁岩	6.2	3.6	0.7	16.2	No281
40	A区	X層	剥片石器？	黒曜石	4	1.9	0.5	2.7	No87
41	13トレンチ	XI層上	石核？	メノウ	1.2	3.4	1.4	4.3	
42	A区	X層	石器	キ石安山岩	7.5<	6.7<	5.9	390	No92
43	A区	X層	石器？	キ石安山岩	6.2<	9.6	4.3	350	No277
44	A区	X層	石器？	砂岩	11.4<	8.8	5.3	600	No46
45	A区	X層	磨石	玄武岩	6.9	7	4.3	265	No79

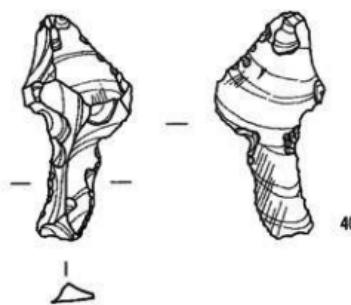
*備考欄の番号は現場における遺物取り上げ番号



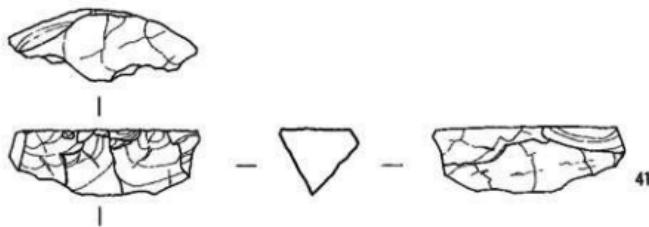
第12図 遺物実測図(3)



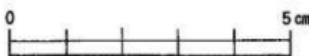
39



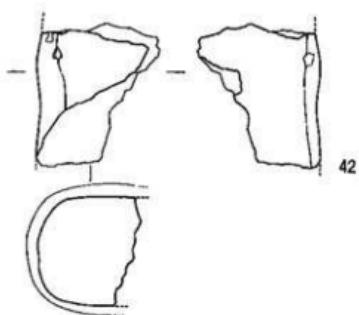
40



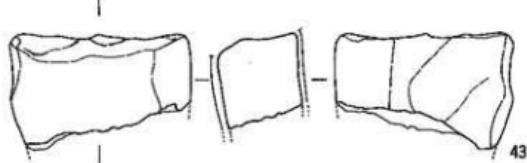
41



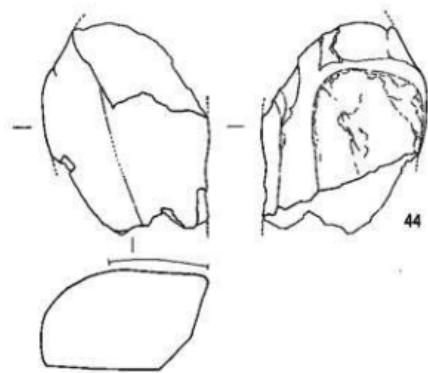
第13図 遺物実測図(4)



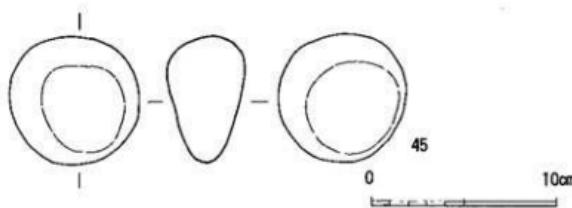
42



43



44



0

10cm

第14図 遺物実測図(5)

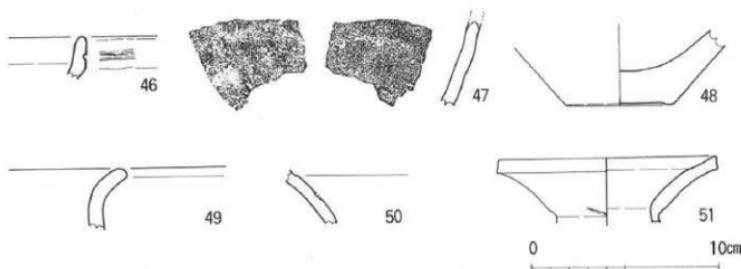
にツブシ痕が見られ、その反対側の側縁に微細な剥離が観察される。X層からの出土であるが、その形態は旧石器時代のナイフ形石器に似る。38は若干透明度のある黒曜石を、40は漆黒色の黒曜石を利用しているが、いずれも不純物はほとんど含まない。41は第2次試掘調査第13トレンチXI層出土のメノウ製の剥片で、石核の一部の剥落品の可能性がある。

礫石器は自然礫がA区全体に多量に出土したわりには、数が少ない。42は片面に凹面がつくり出されており、石皿の破損品と判断した。43と44は石器としては疑問が残るもの、実測図に示した部分に摩耗痕が見られるので、あえて掲載した。45は円縦を利用したすり石である。赤色化しており熱を受けた可能性がある。なお、第2次試掘調査の第3トレンチではIIb層より、頁岩製の剥片が一点出土している(図版11(1))。

(3)弥生時代の土器(第15図)

49と50はC-2区で出土した土器で、図示し得たものはこの2点にとどまるが、他に同一個体と思われる破片が8点出土している。49は口縁部で、端部は丸く仕上げられている。50は頸部から胴部への移行部分で、外面に段を有する。弥生時代中期の壺形土器であろう。

51は第2次試掘調査第7トレンチで出土した壺形土器の口縁部である。頸部は工具による押さえつけにより、極端にくびれる。弥生時代後期のものであろう。



第15図 遺物実測図(6)

註

- 註1 桑野幸夫・郷原保眞・松井建 1959「大隅半島の地質(予報)」『資源研叢報』49
- 註2 町田洋・新井房夫 1978「南九州鬼界カルデラから噴出した広城テフラーアカホヤ火山灰」『第4紀研究』17
- 註3 井ノ上幸造 1988「霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動」『岩鉱』83
- 註4 島津義昭 1989「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』4 小学館

第4章 まとめ

1. 繩文時代早期の遺物について

都城盆地は、霧島火山起源の御池降下軽石層などの多くの火山灰層に厚く覆われている。そのためには、それらの下位に堆積する包含層の調査は経費面・物理面から非常に困難である。

これまで、数メートル下に眠る縄文時代早期以前の周知の遺跡は、偶然の発見によるものがほとんどであった。事実、表面調査による市内遺跡詳細分布調査では、約400か所も見つかった遺跡の中で、縄文時代早期以前の遺跡はその1割にも満たない。

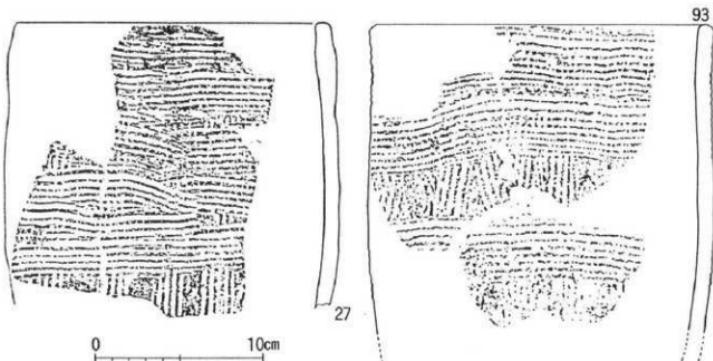
このような状況の中で、今回調査できた屏風谷第1遺跡における縄文時代早期の文化層は貴重な資料を提供することとなった。

まず、包含層の層位については、主に浦牟田スコリア層（Ⅲ層）の下の2番目の腐植土層（X・XI層）であるという点が注目されよう。堂山遺跡（南地区）においては、浦牟田スコリア層直下から、塞ノ神式土器が出土し、さらにその下から、円筒形土器と押型文土器が出土したという。本遺跡において主体となる円筒形土器と押型文土器の出土層位は堂山遺跡のそれに対応しているようである。

次に、土器について言及してみる。

第1類土器と第2類土器はいわゆる円筒形土器に該当する。

第1類土器はその文様から、条線文土器と表現したが、その器形は、桑ノ丸3類土器・桑ノ丸式土器や下剥峯II類土器・下剥峯式土器などと呼ばれている土器群（以下、「下剥峯・桑ノ丸グループ」とする）に類似している。また、内器面のミガキ調整も一致している。ただ、縦方向の条線に横方向の条線を重ねる文様に関しては、当該土器群には類例を見出だせない。同様な施文手法の円筒形土器を探すと、田野町芳ヶ迫第3遺跡IVc類土器、鹿屋市打馬平原遺跡9a類土器などがあげられる（第16図）。しかし、これは縦方向に施文した後に横方向に施文するという施文順序が一致しているだけで、



▲芳ヶ迫第3遺跡IVc類

▲打馬平原遺跡9a類

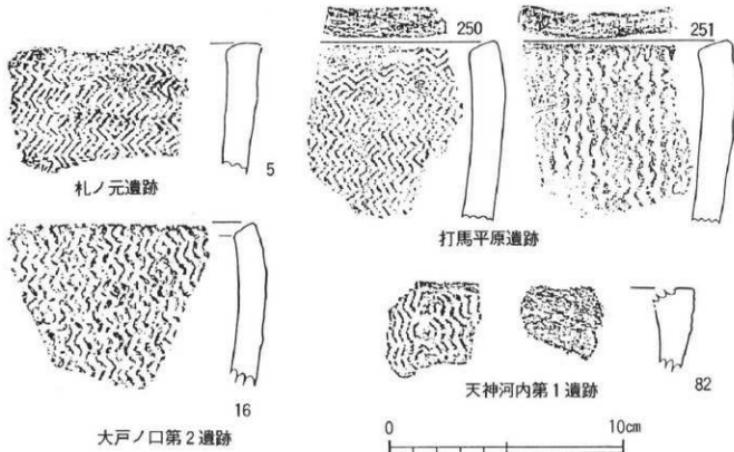
第16図 芳ヶ迫第3遺跡・打馬平原遺跡出土土器（註5・6文献より）

厳密にみると芳ヶ迫第3遺跡と打馬平原遺跡のものは、施文具が貝殻であったり、横方向の施文パターンが異なったりしている。いずれにしても、本遺跡の第1類土器の文様は、下剣峯・桑ノ丸グループの中では今までに見られなかったモチーフということができる。

さて、下剣峯・桑ノ丸グループは、南九州の円筒形土器群の中でも新しい段階に位置づけられている。その文様には、貝殻文や沈線文の他に、最近では押型文や撚糸文の施されたもの（第17図）も発見されており、この時期に異系統の土器文化との接触があったことが指摘されている。^{註5}

第2類土器は条痕文土器を一括したが、出土点数は少ない。14と15は、内器面調整は、丁寧なナデで、外面に斜行条痕を観察することができる。小破片のため全体的な文様展開は把握できないが、あえて、周知の土器様式の中に類例を探すと、「石坂式土器」^{註6}に似ている。従来、石坂式土器の宮崎県内における分布状況は不明な点が多く、おむね鹿児島県を中心とした分布圏が想定されてきたが、最近、宮崎県内においても、断片的な資料が蓄積されつつある。

第4類土器は押型文土器である。文様は楕円押型文が1点のみで、他はすべて山形押型文である。胎土にウンモを含むもの（以下4a類）と含まないもの（以下4b類）に分けられ、文様施文法に着目すると4a類は不規則走向施文で、4b類は規則的施文である。両者の差異は時期差を示すものであろう。4b類の口縁部の19は、内外面に横方向に押型文が施文され、面取りされた内傾する口唇部内面に連続する刺突文がみられる。類例は芳ヶ迫第3遺跡出土土器にもみられるが、これらの施文法は、見方によっては、早水台式土器の口縁部内面の原体条痕を模倣したものとも解釈できよう。2点出土した底部はいずれも平底で、宮崎県においては一つ瀬川以南に尖底の押型文土器が分布しないと



第17図 押型文の施された円筒形土器（註5・6・17・18文献より）

いう現状に當てはまる。さて、九州における押型文土器の分類と編年は、大分県の資料を中心として進められており、現在までに6型式程度に細分されている。これに対し、松永幸男氏は、規則的施文によるものから不規則走向施文のものへという大まかな流れを示し、九州地方の押型文土器期を古段階と新段階に2大別している。宮崎県出土の押型文土器に関しては短絡的に前者の細分試案と対比させるのは困難であると指摘されているので、本遺跡出土土器を松永氏の大別編年案に対比させると、4b類は古段階に、4a類は新段階に該当する。

A区において、第1類土器（円筒形土器）と第4類土器（押型文土器）の主要分布域が、若干重なりながらも異なる傾向にあったことは第3章で触れたが、これが時期差を示すものであれば、円筒形土器と押型文土器の一部とが、互いに独立して一時期を形成することが考えられる。また、押型文土器は2分類されたが、そのいずれかが、時間的に円筒形土器に併行する可能性も想定できよう。

第5類土器は無文土器でいずれも最下層のXI層上部から出土している。破片資料のみで、全容は不明であるが、層位的には、本遺跡における最古の土器ととらえられる。

最後に石器について触れてみる。

石器は、2次的剥離の不十分な剥片が1点見つかっている。なお、押型文土器期に特徴的とされる「鋸形鐵」の出土は見られなかった。

解体具と思われるスクレイパーや使用痕のある剥片には、黒曜石、メノウ、頁岩などが利用されており、形態はパラエティーに富む。

包含層内において礫の出土が目立ったわりに礫石器の出土は極めて少なかった。石皿の破損品と推定される42を除くと、図示した他の資料の使用痕は顕著ではない。

2. 総括

本遺跡の調査成果を以下に要約する。

北側のA区においては、御池降下軽石層の上位の包含層は、以前に削平されていたが、それより下位の縄文時代早期の包含層は良好で、集石遺構や土坑などの遺構と土器、石器、礫などの遺物が発見された。出土土器は、円筒形土器と押型文土器が主体をなす。また、A・B区の地層の傾斜から、台地の西側の谷が、今より東へはいりこんでいたことがわかった。

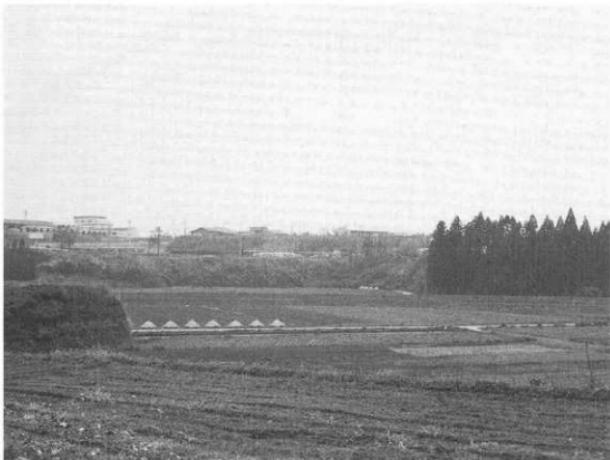
南側のC区では、御池降下軽石層の上位の包含層が、度重なる耕作による搅乱を受けていたものの、おそらくは中世のものと思われる溝状遺構2本と縄文時代晩期と弥生時代の遺物を得ることができた。溝状遺構の走行はそれぞれ南北方向と東西方向と異なるが、いずれも幅が50cm程度で、規格は共通しており、土地の区割りを意味するものと考えられる。

さて、今回の調査区の西側に所在する工場が建設されたときに出土したと伝えられる多量の遺物が、都城市立図書館に保管されており、それらの時代は縄文時代後期から古墳時代と多岐にわたっている。C区で見つかった縄文時代晩期と弥生時代の遺物との関連が指摘されよう。

註

- 註1 次部喜多夫編 1987 「都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）」都城市文化財調査報告書第5集 都城市教育委員会
- 次畠光博編 1988 「都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）」都城市文化財調査報告書第6集 都城市教育委員会
- 次畠光博編 1989 「都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北東部）」都城市文化財調査報告書第8集 都城市教育委員会
- 次畠光博編 1990 「都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北西部）」都城市文化財調査報告書第12集 都城市教育委員会
- 註2 次部喜多夫氏教示 平成2年度に調査が行われた 正式報告書は未刊行
- 註3 新東晃一 1989 「早期九州貝紋文系土器様式」『櫛文土器大觀』1 小学館
- 註4 註3と同じ
- 註5 面高哲郎編 1986 「芳ヶ迫第1遺跡・芳ヶ迫第2遺跡・芳ヶ迫第3遺跡・札ノ元遺跡」県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田野町文化財調査報告書 第3集 田野町教育委員会
- 註6 濱戸口望編 1988 「打馬平原遺跡 打馬平原地区の城山ハイランド造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（8）鹿屋市教育委員会
- 註7 註3と同じ
- 註8 西中川駿・東和幸 1990 「薩摩半島の考古学Ⅲ 川辺町小崎遺跡」「鹿児島考古」第24号 鹿児島県考古学会
- 註9 河口貞徳 1955 「南九州の条痕土器—吉田村及び知覧町遺跡—」『石器時代』1号 石器時代文化研究会
- 註10 宮崎県では串間市の大平遺跡で出土したと報告されているが、実測図は公開されていない（河口貞徳 1963「宮崎県串間市大平遺跡」『日本考古学年報』10 日本考古学協会）
- 註11 註5と同じ
- 註12 岩永哲夫 1988 「九州東南部における縄文早期遺跡の概観—出土土器を中心として—」『宮崎県総合博物館研究紀要』N o. 13 宮崎県総合博物館
- 註13 賀川光夫 1965 「九州東南部」『日本の考古学』II 河出書房新社
- 橋昌信 1980 「まとめ」『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学附属博物館
- 後藤一重 1981 「下普生B遺跡」「菅生台地と周辺の遺跡」VI 竹田市教育委員会
- 註14 松永幸男 1987 「九州地方における押模文土器編年の再検討」「東アジアの考古と歴史」岡崎敬先生追記念論集』中巻 同朋社
- 註15 註12と同じ
- 註16 長野真一 1991 「第4章 まとめ」『県営圃場整備事業（菱母地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 仮牧段遺跡』東市来町埋蔵文化財調査報告書（2）東市来町教育委員会
- 註17 岩永哲夫・芦高真知子 1991 「大戸ノ口第2遺跡」高鍋町文化財調査報告書第5集 高鍋町教育委員会
- 註18 普付和樹・谷口武範 1991 「天神河内第1遺跡 大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」宮崎県教育委員会

図 版



(1) 遺跡遠景（西から）



(2) 遺跡空中写真（東側上空から）



(1) A 区 X層遺物出土状況（南から）

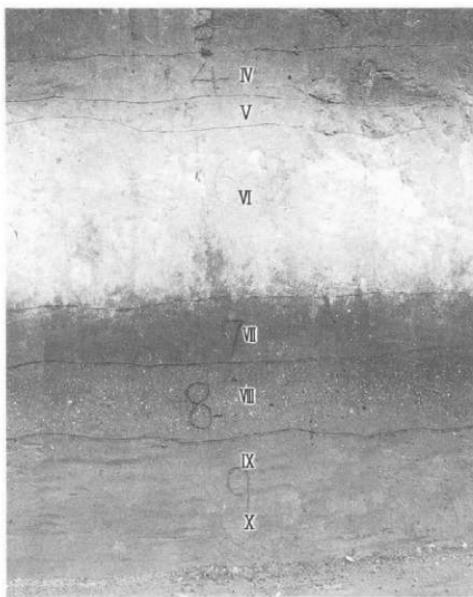


(2) A 区 X層遺物出土状況（北から）

図版 3

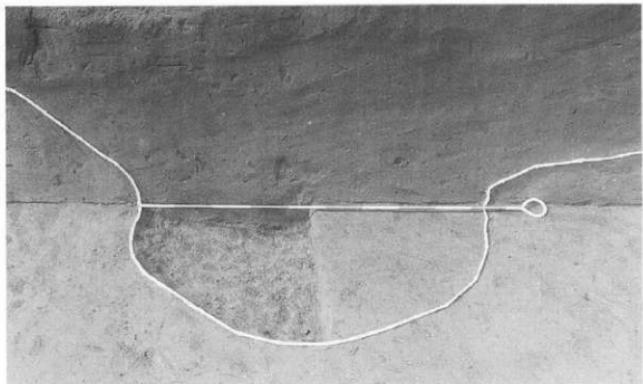


(1) A 区 XI 層上面 (北から)



(2) A 区 土層断面 (東壁)

図版 4



(1) A 区 土坑確認状況 (東から)



(2) A 区 土坑完掘状況 (南から)



(3) A 区 押型文土器出土状況



(4) A 区 X層調査風景 (南から)



(5) A 区 XI層調査風景 (南から)

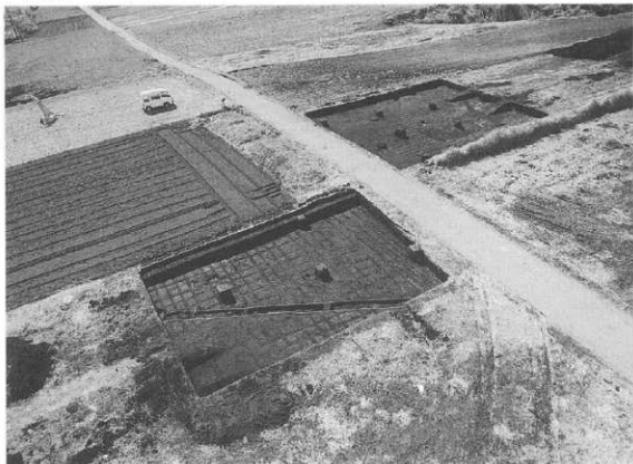


(1) B 区 完掘状況 (南から)

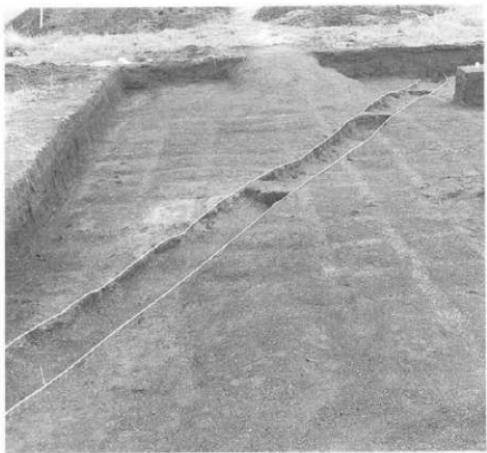


(2) B 区 土層断面 (北壁)

図版 6



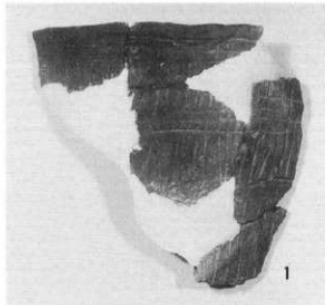
(1) C 区 空中写真 (北側上空から)



(2) C -1区 1号溝完掘状況 (西から)



(3) C-1区 1号溝断面

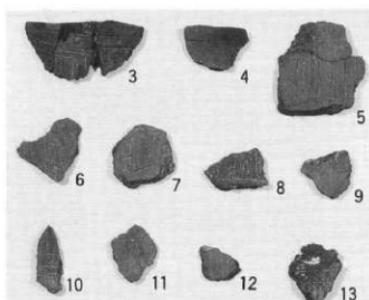


外 面

(1) 第 1 類土器 (条線文土器)



内 面

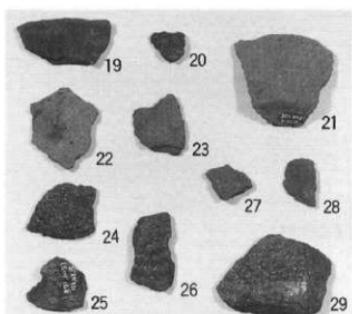


外 面

(2) 第 1 類土器 (条線文土器)



内 面



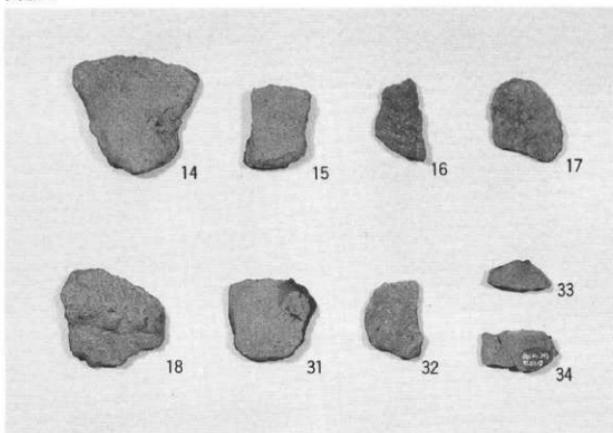
外 面

(3) 第 4 類土器 (押型文土器)

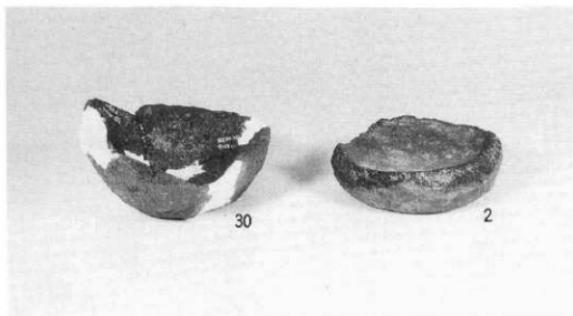


内 面

図版 8



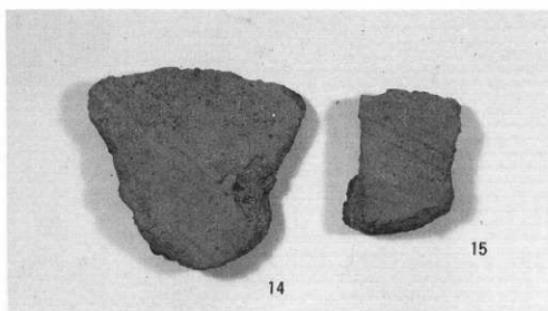
(1) 第 2・3・5 類土器



(2) 第 1・4 類土器底部



(1) 第1類土器文様拡大

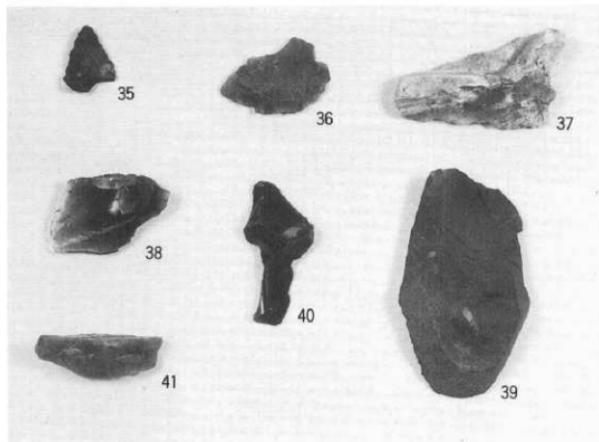


(2) 第2類土器文様拡大

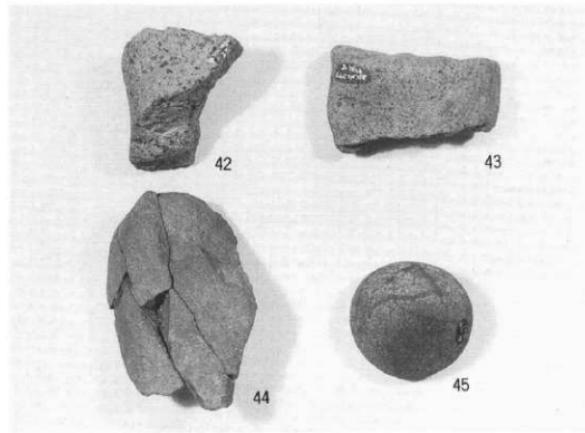


(3) 押型文土器口縁部内面文様拡大

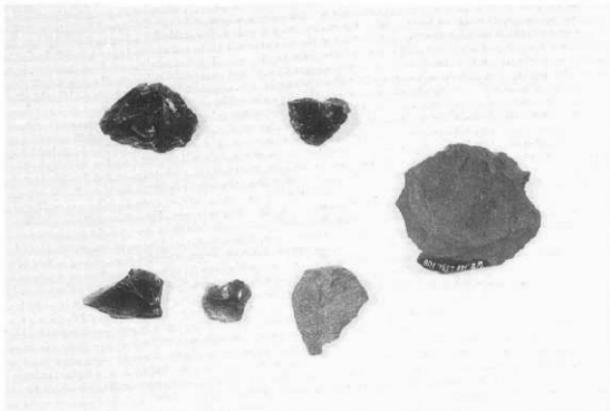
図版10



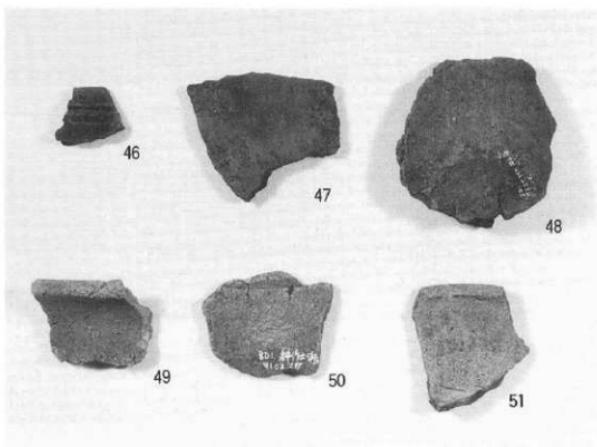
(1) 剥片石器



(2) 碾石器



(1) 刺片（右端以外はすべてA区出土）



(2) 繩文時代晩期土器および弥生土器

THE SUMMARY REPORT OF THE EXCAVATION OF BYOBUDANI No. 1 SITE

I. The location of the site and an outline of this survey

Byobudani No. 1 site is located in Kamizuru town, Miyakonojo city, Miyazaki prefecture. Miyakonojo city is in the southeastern part of the island of Kyushu, and covers almost the center of the basin which is surrounded by the Kirishima mountain range and the Wanizuka mountain range.

This site is located on the northwest edge of the plateau which is 150 meters above sea level, between the Oyodo River and the Marutani River, one of its branches.

Two nearby small gullies with springs cut into the site.

The excavation was held from January to March in 1991, prior to the construction of an office and a lumber yard for the Miyakonojo lumbering cooperative society.

The site was divided into 3 parts, A, B and C. The total area is 600m².

II. The layer at the site

In this site, there are 12 layers from the surface to the base layer, Ito—Pyroclastic Deposit (called "Shirasu" in Japanese which is vitreous soil accumulated all over Southern Kyushu surrounding the Kinkou Bay).

Layer III (third layer from the surface) is Miike layer of pumice, which gushed out from Kirishima volcano about 4000 years ago.

Layer VI is Akahoya layer of tephra, which gushed out from Kikai caldera about 6300 years ago.

Layer VII is Uramuta layer of scoria, which gushed out from Kirishima volcano.

These tephra layers are key layers which enable us to learn about the age of the cultur layers.

III. The outline of the excavation

In area A, one pit and one stonecluster of the Early Jomon Period were uncovered from beneath Layer Ⅳ, Uramuta Scoriaceous layer. Besides this, pottery, stone implements and many fragments etc. were excavated. The pieces of pottery amounted to 60, and most of them were cylindrical earthenware pots or pattern stamped pots. Kinds of stone implements found were one arrow-heads, 2 scrapers, 2 flakes which show signs of have been used, and one grind-stone.

The materials used for these stone implements were obsidian, agate, shale or andesite etc. according to the purpose of the implement.

In area B, on the side of one of the gullies cutting into the plateau, no relic was excavated.

In area C, pottery of the Late Jomon Period and of the Yayoi Period were excavated from the black humus layer, accumulated on top of the Miike Pumiceous Layer.

Besides this, two medieval ditches of 50 centimeters wide were confirmed.

Worthy of special mention is the culture layer of the Early Jomon period which was excavated in area A. The data collected from this site is very precious, because there are few examples of this period in Miyakonojo city.

(written by HAGIWARA Chikako and KUWAHATA Rosemary)

都城市文化財調査報告書第17集

屏風谷第1遺跡

平成4年3月

発行

宮崎県都城市教育委員会

宮崎県都城市姫城町6街区21号

印刷

(株)都城印刷